
詰め合わせ。

ゆきみね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詰め合わせ。

【Zコード】

Z5367T

【作者名】

ゆきみね

【あらすじ】

ふと思いついた小話をちょろつとあげる詰め合わせ集です。お暇
な時にどうぞ！／ちょっとした息抜きものですので、いつも以上に
不定期更新です。／シューべン・しえいも共に未完、執筆中です。

登場人物

サリュエナ・ルー（20）

ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーグ店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。現在はサリア（13）としてティーの護衛の仕事をしている。軍事訓練の経験がある。独身彼氏なし。

ロイ・シュー・ベン（32）

シュー・ベン家長男。少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性。性格は温厚で人当たりがよい。商家として培つた情報収集能力は桁違いだが、使い所がおかしいことがある。サリアもといサリュエナにぞっこん。

クイット・シュー・ベン（25）

シュー・ベン家次男。腰まで伸びる茶色い長髪を首の後ろの部分でまとめている。シュー・ベン家のプレーボーイ。誰もが認める美形で、女性の陰が絶えない。のらりくらりと氣だるげに生きているが、情報収集能力においてはロイに劣らない。

ベル・シュー・ベン（18）

シュー・ベン家三男。赤茶けた短髪。一般的な筋肉量だが、シュー・ベン家の中ではがつしりしている方なため、通称筋肉ダルマ。シュー・ベン家の中で最も常識人で不幸人。一応学生。

クレア・シュー・ベン（16）

シュー・ベン家長女。栗色の髪。サリューハの経営するアンティーク雑貨店がお気に入り。いたって普通の女の子。

ティー・シュー・ベン（14）

シュー・ベン家四男にして末っ子。茶色い短髪。小生意気な口を聞くこともあるが、尊敬する相手にはその尊敬の念を隠さない。サラアのように強くなるため、日々鍛錬中。

実は私、

「僕のサリアを知りませんか」
いつ誰がお前のものになつた。

思わずヒクッと上がつた口角を無理矢理ただし、私は「見かけてませんね…」と苦し紛れに返した。

私には特定一部の人間にしか打ち明けていない秘密があった。当然特定一部に含まれない彼には秘密を明かしてはいなかつた。が、「サリアはとつても可愛い子なんです。セミロングの黒髪が歩く度に揺れて、クリアブルーの瞳がとてもきらきらしていて。それはそれは男心をくすぐるつていうか…。兎にも角にも将来有望だから、その辺をふらつかせておくと悪い大人に引っかかるてしまうかもしれない。そんなことになつたら僕はもう自制がきかないんじやないかと思つています。だつてあの子は13にしてあんなに大人びいて、尚且つまだ子供のあどけなさを残していく、とても愛くるしいつたらないんですから。今はペッタンコだけど、それも成長に伴つて修正されていくと思つています」

ここまで来たら、もう暴露させてほしくなる。言わなかつた私が悪いかつたんですね、だからもうやめてください、熱のこもつた目で13歳の少女の可愛さを熱弁しないで下さい。13歳でペッタンコなのは仕方ないんです、放つておいてあげてください……。

「だから、見つけたら教えて貰えます? 今どこで何をしているかと思うと気が気じゃないので」

「え? え、ええ、わかりました…」

一瞬飛んでいた思考をなんとか引き戻し、私が苦笑いを返すと、愛を語り終えた彼はにっこり笑つて石畳の向こうへと去つていった。その男はロイ・シュー・ベン、見た目こそ20代前半だが、正真正銘の32歳独身。

(こんな一面知りたくなかった…)

私、サリュエナ・ルーは大きくため息を吐いた。私は今、ウェーブのかかった黒髪をハーフアップにし、濃紺のワンピースを身にまとっている。見た目の年齢も20歳くらいで、ほんきゅつほんとまではいかないものの、大人の女性らしい体つきをしているという自負はある。だからいくらサリアとの見た目に共通性があつても、自分から彼に秘密を暴露しない限り気付かれないだろうと信じていた。だが、さつきの愛の語りつぶりを見ると、「本当に気づいていないのか、「気づいていないふりをした羞恥プレイ」なのかわからなくなる。後者ならなんて拷問だ。

(こんな仕打ちを受ける位なら、もういつそ言つてしまいたい…！)
サリアとサリュエナは同一人物である、と。

見た目の年齢をいじれる、それがサリュエナの秘密だ。どどのつまり魔女である。魔女とは忌避されるものでは無いが、希少で貴重な存在であるため、多くの魔女が自分が魔女であることを隠しながら生きているのが現状だ。たまに公にしている人達もいるが、その人達はバックに大きな貴族が付いていたりして、身の安全が保障されているからそういうことが出来る。一般的の魔女が自分は魔女だなどと宣言したら、次の日から魔女という存在を慕つたり物珍しさで訪れたりする人々に家の周りを埋め尽くされ、外に出ることもまたならなくなるだろう。その中には魔女を自分のものにしようという危ない人間もいるので、尚更公言する者は少ない。

そうやつて魔女であることを隠していても、所詮は人間。食い扶持を稼いで生きて行かなくてはいけない。だから大半の魔女は、気の合う魔女同士でコミュニティを形成して情報を交換しながら、個々特有の能力を密かに用いて生活していた。

私自身もこの秘密を生かし、今までいろんな仕事をこなしてきた。今回はある商家の方から、息子の学校での身辺警護を依頼された。

故に一番手っ取り早い方法として、13歳の娘の姿になり、側に控えることにしたのだ。勿論依頼者と自分の間には仲介人がいるので、依頼者も息子も私の秘密は知らない。せいぜい「13歳にしては強い女の子」くらいの認識だろう。曲がりなりにも軍や傭兵部隊を擁している国なので、魔女と疑うよりも、そつちだと認識した方が現実味がはつきりするものなのだ。

こうやって魔女はなんとか存在を隠しながら一生懸命生きている。だから簡単に魔女だと公言するつもりは実際無い。

（でもあんなに幼女に期待をかけられたら、魔女どころか、実は20歳だなんて絶対言えない……）

20歳といえば、まだまだ女も盛りだし、と今まで大した年齢詐欺ではないと思っていた。しかし13の娘に愛を語る男に、実は20歳です！なんて言つたら、とりあえず陽の目を拝めなくなりとうで怖い。

ぶるりと身を震わして、ロイの姿を思い描く。ロイはサリュエナの仕事の対象である、14歳のティー・シュー・ベンの兄だ。身長は170位、少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性である。性格も温厚で人当たりがよい。實に好ましい男性だ。更に言うなら依頼者の息子の一人なのだから、それなりに地位のある人間なのだが、一切偉ぶつたりしないところも好ましいと思っていた。普段からサリアをティーの護衛兼友人として大事に扱つてくれたこともあって、自分がひどく懷いて自覚はあつた。

（だけどやつぱりロリコン…）

ロイとヒューの歳が離れすぎなのも結構気になるが、それは問題ではない。問題は20歳近く離れた弟と近い年の娘に愛を語ることである。

サリアで居る時は一切見かなかつたロイの一面に、引かずにはい

られないサリュエナだった。人間必ず何か隠し事があるものだが、性癖の隠し事ほど怖いものは無い。年齢詐欺だなんてまだまだ優しい方だ。

実は、「ロイの場合」

ロイの場合

青くなったり赤くなったり、彼女はとても忙しそうだった。自分でも言いすぎかと思ったが、まああの位彼女の肝を冷やさせるのが丁度よかつたのだろう。

「あれでばれてないと思っているんだから、更に愛おしい」

ロイはフツと笑んで、自分の部屋の隅に置いておいた鞄から書類をだし、視線を落とした。

サリュエナ・ルー、20歳。身長162、ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーク店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。軍事訓練の経験があり、現在独身彼氏なし。

個人情報てんこ盛りの書類には、『丁寧に全身とバストアップの写真まで付けている。自分で情報収集をしただけある、なんて綺麗な写りだろう。

「家族と同居さえしていなければ僕の部屋にポスターにして貼るんだけど……」

自分を慕う淑女諸君の前では絶対言えないようなストーカー的発言をぽろりと落とす。しかし5人兄妹の長男である自分の部屋には、よく弟や妹が、一緒にゲームをしに来たり、勉強を教えて貰いに来たり、怒らせた父親から隠れに来たり、新しい女性から逃げて來たりするものだから、滅多なことはできない。

（…いや、女性から逃げてくるのをわざわざかくまつてやる必要はないんだけど…）

一番年上の弟、クイットは女癖が悪い。兄も認める美形だから女

性のおっかけが後を絶たないのは仕方ないとはいえ、もう25なのだから自分でどうにかしてほしいものである。

（ティーはまだ遊び盛りだからいいかな。クレアはまだ16だけど、人一倍勉強を頑張っているから手伝つてあげなくちゃ。ベルは、まあ18歳で反抗期なのは仕方ないね、どこかに鬱憤を晴らせる場所が無いといけない）

兄妹たちの顔と事情をゆっくり思いだし、（やつぱりポスターは無理か）とため息を吐く。こうなつたらやはりサリアを直に愛でるしかないのだが、そうすると周囲から「ロリコン」と扱われてしまう。栄えるシユーベン商家の長男として、それは少しいただけない。そこでロイがでた最終手段が「本人にそれとな一くすほのめかす作戦」だった。最終的にそれとなぐどころかはつきりと断言してきたが、たまつた愛情を幾分か伝えられたので、自分としては満足である。

サリュエナの存在を知ったのは2年前。クレアがとても可愛らしい小店があるので行つてみたいたいと言つたのがきっかけだった。クレアは普段から真面目な子だから、こいついう時はわがままを聞いてあげようと、2人で一緒にその店を訪れた。その店は営業日も営業時間も不定期らしく、「今日はラッキーだ」とクレアが喜んでいたのを思い出す。店の中にはアンティーク調のアクセサリーやちょっとした家具が置いてあって、中々品の良い店だという印象を受けた。（これならクレアが普段使っていても問題ないね…）

視界に入った蝶をモチーフにした紅色のネックレスに手を伸ばすと、クレアが「あ、」と声をあげてこちらに駆け寄ってきた。

「兄様、それ可愛い

「ん、気に入つた？ 合わせてみる？」

「でしたらこの鏡をお使いください」

急に現れた第三者の声に、ハツと振り返ると、濃紺のワンピースを着た黒髪の少女が立っていた。手には瑪瑙のはめ込まれた空色の

手鏡を持っている。

「あ、でもそれ、売り物じゃないんですか……？」

クレアが恐る恐る尋ねると、その少女はニコッと笑った。

「アンティーク品は使ってこそ、ですよ。それに私がここ^の主人ですから、気にする必要はありません。まあ、どうぞ」

少女はクレアの前にスッと鏡を差出す。その動作につられるように、手にしていたネックレスをクレアにつけてやると、とても良く似合っていた。

「ああ、とても可愛いですね。お嬢さんの栗色の髪に映えていますよ。もう少し歳を重ねれば、新しい味わいが生まれるでしょうね」少し年上の女性に褒められたクレアはちゅっと恥ずかしそうにしながら、鏡に映る自分を見ている。

「僕も似合うと思うよ。それを買つていいですか」

「いいの兄様？」

「久しぶりの買い物だらう、遠慮することはないよ」

「ありがとう！」

やつたあ、と喜ぶクレアを笑顔で見つめながら、少女はクレアに話しかける。

「うちの子を引き取つてくださつてありがとうございます。それは着けたままで構いませんよ。それとさわやかですが、こちらのお菓子もどうぞ」

そういうて彼女は可愛らしいお菓子の詰め合わせを手渡した。よく見れば近所にある有名な菓子店のロゴが入っている。「いつも不定期営業でお客様に迷惑をおかけしていますからね」、とその少女は笑った。

帰り際、まだ歳は18、9だと見えるその少女に、ロイはふと生まれた疑問を投げかけた。

「失礼ですが、どうしてそのお年で自営業を？」

18歳辺りから働き出す子は少なくない。だが自分で一から仕事

を始める子はあまり居ない。人生経験が足りない為、リスクが高いからだ。

すると少女は、今日一番の笑顔でこう言い放つた。

「企業秘密ですよ、お客様」

その花が咲き乱れるような笑顔に、自分の心はがっかり掴まれたのだと、後になつてから気づいたのだった。

その後も、クレアと共に何度か店に顔を出して、少しづつ知り合いの立場になつた。そして影では自分の持てる力を最大限に活用して、彼女の情報を収集した。魔女だと知った時はその情報をかなり疑つたが、今ではあの店もカモフラーージュの一種だったのだと理解している。そして奇跡的に、彼女がティーの身辺警護をすることになつた。これはもはや運命だ。

「きっと振り向かせてみますよ」

ロイ・シュー・ベン、32歳。13歳の娘に恋しようと20歳の女性に恋しようと、年齢差的にちょっと危ないお年頃。素直に好きだと言えない甲斐性なし。現在ちょっと間違つた方向から、じわじわサリュエナにアピール中。

実は、「ベルの場合」

ベルの場合

父親と顔を合わせるたびにロイ兄さんの部屋に逃げ込むことを、ロイ兄さんは反抗期だから仕方ないことだ思つてゐるようだが、はつきり言わせてもらおう。

「父親が顔を合わせるたびに見合い話を寄越ししなければ、自分はいたつて素直な人間だ」と。

第一にだ、どう考へても見合い話をもつてくるべき相手は俺ではないはずだ。クイット兄さんは女性にもててゐるので、当面の心配はないだろう。それよりも、我が家にはもっと結婚すべき人間がいるはずではないだろうか？ そう、32歳にして独身貴族満喫中のロイ兄さんだ。その抗議も兼ねて毎度ロイ兄さんの部屋に逃げ込んでいると言うのに、どうして父親もロイ兄さんも何とも言わないのか。こんなのは絶対おかしい。俺はまだ18歳だ。まだ学生だ。どう考へても三十路過ぎた顔面詐欺のロイ兄さんが見合いをするべきではないだろうか。

そこまでひたすら考へて俺はハツとし、それはそれは深く、ふうっと息を吐いた。じつも長々と考へて、実際に行動に移して、実現するならとつゝの昔にやつてゐる。

赤茶けた自分の短髪をがりがりと搔いて、俺は生産性の無いことを考えるのを一度やめることにした。

「当のロイ兄さんは、最近どこぞの幼女の話しかしないしな……」浮いた話の一つもない兄に期待をかけるとは思えない。だからといつてこの歳で結婚したくない自分は、あの阿呆な父親の方をど

うにかしないといけないようだ。だがあの父親、意外にしつこい。

「……ああ、相手をするのも面倒くさい。

「……ああ、また生産性の無いことを……」

少し暇になるとそのことを考えてしまう可哀そうな自分を誰かどうにかしてほしい。とりあえず体を動かすなりして、違うことを考えよう。以前クレアには「ベル兄様は筋肉ダルマね!」なんて笑顔で言われた気もするが、そんなことは気にしない。誰もボディービルダーみたいにむつきむきなわけじゃない。運動部の人間ならあって当然の筋肉量だ。筋肉の無い優男なんて、クイット兄さんだけで十分だ。

(せめて、がたいがいいとか言ってほしかつたけどな……)

少しづるーな気持ちになりながら、何とか気持ちを切り替えようと、ガタツと椅子を引いて、自室から出るためにドアを目指す。そしてドアノブに手をかけようとしたその時だった。ドアがひとりでに開け放たれた。

「やあベル！ 今日は隣町の美女を紹介しよう！」の写真を見て

「うらん！ なんて素敵な……」

「くたばれクソオヤジ！」

もう部屋からも出たくない。

実は、「ティーの場合」

ティーの場合

半年前から、父様が僕に身辺警護の人間をつかせた。最近うちの家も仕事がうまくいっているらしくて、心配した父様が、せめて一番小さい僕につけよう、と提案したのが始まりだった。身辺警護というくらいだから、どんなじついのがくるのかと、自分の茶色い短髪をくくるくるいじりながら身構えていたら、

「初めてまして、サリアです」

「は、初めてまして…？」

背格好も似通った、同じ年くらいの女の子だった。

うちの学校は年齢じゃなくて学力や体力を総合的に鑑みてクラスが編成される。サリアは護衛ということで特別に僕と同じクラスになつたけど、普段は全然干渉してこない。転校初日に「ティーの家で働いています」なんて言つたときにはどうなることかと思つたけど、それ以外はふつうのクラスメイトだつた。

ただ登下校だけは一緒で、それを他の男子に冷やかされるのが、どうも恥ずかしかつた。

「付き合つてんのかティー！」

「違うつて言つてんだろ！」

反対方向からクラスメイトの冷やかしが飛んでくる。違う道を帰るんだから、こっちのことなど気にせずとつとつ帰ればいいものを。「誰がサリアなんかとさ…！」

僕はふんっと鼻を鳴らして少し坂になつた石畳を駆け下りる。後ろからサリアの軽い足取りが付いてくる。

正直なところ、サリアはどこか大人びているところがあったし、

周りからの冷やかしもあって、かなりとつつきにくかつた。だから登下校の時は、いつも僕が前を歩いて、サリアがその後ろに付いていく、という形になっていた。そうすればサリアの顔を見なくて済むし、八百屋のおばちゃんに挨拶代わりに「仲良しだねえ」なんて言われなくて済む。

「イー…

（大体サリアは仕事で一緒にいるだけだつてのつ！みんなしてさ…）

「ティーつてば」

「え？」

自分の名前がずっと呼ばれていたことに気が付く。

「どこ行くの、家、あっちでしょ」

サリアが肩を竦めて、自分が進んでいる方向とは逆方向を指す。いろいろ考えている内に、全く違う方向へ歩いてしまっていたらしい。だがそれを認めるのは恥ずかしくて、僕は一度サリアに向けた顔を、ブイツと逸らした。

「きょ、今日はこっちから帰るんだよ！」

「……そつちは逆方向じゃない。それにそつち、変な人とか出るよ」

「いいんだよ！ 大丈夫に決まつてんだる、サリアは嫌ならそつちから帰れば

言い聞かせるサリアを無視して、一度踏み込んだ裏路地を突き進む。いつも通つている表通りとは違つて薄暗いその雰囲気に、すぐにはこの道を来たことを後悔した。だが今更引くわけにもいかない。

「ティー…

「なんだよ、サリアは来なくていいって言つたる。怖いなら一人で

…

「何々、お子ちゃまがこんな昼間から逢引きかなー？」

「！！」

突如現れた人影に、ビクツと体を震わし、歩みを止めた。行く手

には、見るからに全うな社会人には見えない青年が三人。

「ん、なわけないだろ。そこどいてくれよ兄ちゃん、早く帰んなき

やなんないんだから」「

精いっぱいの虚勢を張つて男達を睨むが、こんな子供の睨みがきくわけもなく、男達がゲラゲラと下品に笑う。

「ガキってのは本当偉いなあ？口が暮れるまでにお家に帰んないとママにしかれちゃうつてかあ」

「そう言つなや、お兄さん達と少し遊んで行けつて、なあ？」

「よく見たらいい服着てんじゃねえか。お前、良いトコのボンボンか」

薄汚い手がこちらに伸ばされてきたその時だつた。パシンッと音が鳴り、男の手が払われた。いつの間にか自分のすぐ隣に来ていたサリアが、その男の手を払つたのだ。

「薄汚い手で触るな」

「ば、サリアッ！」

こういう時は下手に刺激してはいけないことくらい、僕だつて知つてゐる。今は子供の僕とサリアしかないのに、どうやってこの状況を乗り切るつもりなのか。

「こ、のくそがき…」

キレた目をした男がぐわっと拳を振つた。僕は、ますいー！とサリアを庇おうとしたが、その必要は全くなかった。

「ぎやあつ！」

サリアは小さい体をスッと男の脇にすべらせ、背後に回つたかと思つて、男の身体を僕に当たらぬように思いつきり蹴とばした。そしてその男の結果を見届けることもなく、そのまま体を反転させ、タツと地面を蹴つて、後ろに控えていた残りの男の懷に入り込んだ。そしてどこから取り出したのか、両手の中で鈍く光る鈍器を勢いよく彼らの腹部に叩き込んだ。

「ぎやあつ……！」

「うぐあつ……！」

男達は醜い声をあげて、その場にばたりと倒れ込んだ。そして、サリアはまたその男達の醜態を見つめることもなく、手にしていた

鈍器を僕の方目掛けてビュンッと投げた。

「うわっ！」

ついでに殺られる！直観的にそう感じて思わず両腕を顔の前でクロスさせたが、予想した衝撃は僕には一向に訪れなかつた。不思議に思つてそろりと目を開けると、その鈍器は、サリアが最初に攻撃した男の顔面に直撃していた。前のめりに倒れ込んだ後、身を反転して起き上がろうとした男の気配を察して、サリアがとどめをさしたのだ。僕は呆気にとられて、ぽかんとした顔のままサリアに視線をやつた。

「……そんな目で見ないで、手加減したから死んでないよ、多分」だがその時、僕にはサリアの声なんか聞こえていなかつた。しばらく呆けた後、ハツと我に返り、サリアに歩み寄つて、がしつと彼女の肩を掴んだ。

「テ、ティー？」

「……え よサリア……」

「えと、はい？」

「すっげえ よサリア！！ やつぱり警護の人間だけあるんだな！お前まだ13歳だよな？なのにこんなに強いなんて、すっげえよ！」一瞬だつたじやんか！ どうしたらこんなに強くなれるんだ？僕もお前みたいになれるか！？ 教えてくれサリア！」

「えーと……。とりあえず、帰ろっ……？」

「おうー！」

今思えば、面と向かつて素直にサリアと話したのは、あれが初めてだつた。

その後、毎日所構わず「サリア！ 訓練つけてくれ！」とサリアを追いまわしては彼女にブツ飛ばされていたのは、また別のお話だ。そしてそれを羨ましそうに、一番上の兄が物陰から見ていたのも、また別のお話。

「つま」、「サリュエナの場合」

差し出されたのは、見るからに美味しそうな手作りダミエだった。ダミエとはアイスボックスクッキーのこと。チェック柄が特徴の四角いクッキーだ。いや、今はそんなクッキーの特徴等どうでもいい。問題は、「何故、彼が、私に、それを」差し出しているかなのだ。

「……困りますシユーベンさん」

「ロイです」

「……困ります、シユーベン、さん」

誰が名前を呼ぶものか。私はシユーベンに力を込めて呼ぶ。

「ロイです」

「……ですか、シユー、」

「ロイです」

「シユ、」

「ロイです」

「……ロイさん」

「はい、なんでしょう」

もう言い返せない、そう思つて悔しさいっぱいに名前を呼ぶと、凄く嬉しそうな顔をされた。自分の敗北をひしひしと感じる。そもそもサリュエナとしての彼との付き合いはそう深いものでは無い。お客さん以上友達未満だと認識している。となると名字で相手を呼ぶのは「ぐく自然なことなのだ。だが彼は私がサリアとして振る舞っている時と同様に、彼を名前で呼ぶよう強い。そこまで親密な関係ではない彼が、更に言うなら「サリア愛！」の彼が、サリュエナである私に名前を呼ばせる意味が全く分からない。

だが今はそんなことを気にしている場合ではない。今は、この状況を乗り切らなくてはいけない。

「ええと、じゅうもの貰うのは困ります……といつか、その、」

「あーん」は、困ります

そう、何故か突然店に訪れてきた彼が、「プレゼントです」と、クッキーを「あーん」させようとしているのだ。何故自分の店の前で「あーん」を強要されなくてはいけない。プレゼントなら素直に包装して手渡してくれればいいのに。

「安心してください、手作りですが、衛生には気を配つて作りました。それにきちんと美味しいですよ?」

ええ知つてます、だつてそれ私とティーーと貴方が、貴方の御宅で作つたんですもの!

(口が裂けても言えませんけど……!)

言いたくて言いたくて、ムズムズする自分の口に何とかチャックをする。そんなサリュエナの心境を知つてか知らずか、ロイはにっこり笑つたまま、そのクッキーを固く閉ざされたサリュエナの口に押し付けてきた。

「むぐ！」

「今日弟とサリアと作つたんです。可愛い子どもが一生懸命作つたんです、どうぞ食べてくださいね?」

「む、ぐ……」

なんという脅し文句だ。それにむづき貴方の御宅で餌付けと言わんばかりに食べさせられてきたのに、まだ食えと言つのか……いや、貴方は知らないのだろうけれど。

「ダメですか?」

(そんな目で見ないで頂きたい！捨てられた子犬のような瞳で見ないで頂きたい！)

罪悪感に駆られる。そうだ、よく考えれば、お菓子と可愛い子ども(‘勿論ティーのみ)に罪は無い。幾ら自分がお腹いっぱいで、食べさせようとしている相手がロリコンであろうと、食べないのは勿体ないことだ。そうだ、食べ物にも子どもにも罪は無いのだ。罪は無い。

「……いただきます」

大の男の潤んだ瞳に負けた私は、自分をなんとか説得し、小さく

口を開いてその甘い菓子を口内に迎え入れた。

「……美味しいです」

素直に感想を述べると、ロイはまたにつっこりと笑った。

「でしたらこれ、全部食べさせてや、」

「あとは自宅で頂きますので！」

勢いよくロイから30枚近くクッキーの入っている袋を取り上げ、

私はまるで飛ぶように店内に逃げ帰った。

もつじれ以上は許してくださいー。

実は、「クイットの場合」

シュー・ベン家のプレー・ボーア」とクイット・シュー・ベンは、腰まで伸びる茶色い長髪を、首の後ろの部分でまとめた、誰もが認める美形だ。そして今も、つい一時間前に別れを告げた女性から逃げてきたところだった。

「いつか刺されそうですね」

「クイット兄なら有り得るな」

シュー・ベン家の客間のテーブルでティーとボードゲームをしながら、呆れ気味にクイットに声をかける。するとソファに深く腰掛けていた彼は「ええ？」と氣の抜けた声をあげた。

「二人とも、ちょっと失礼じやないかい？　幾ら私だつて刺されるほど酷いことはしてきていいよ。さつきだつてきちんと別れを告げたのに、あつちが何だか結婚する予定だつたとかなんだと勘違 iiし、」

「あ、チェックです、ティー」

「え、嘘！？　ちょ、サリアってボードゲームも強いのかよ！？」

聞いてないし

「私の話こそ聞いてないよね？」

反応を返して貰えなかつたクイットは、構つてくれと言わんばかりにティーに引っ付いてくる。しかしティーも慣れたもので、ぱつぱつと兄を切り捨てる。

「クイット兄の女性関係は日常茶飯事過ぎて飽きた」

10代前半の少年にここまで言わせるのだから、彼の遍歴はどうつどりの長編小説が出来上がるほどに素晴らしいものなのだろう。実にいい反面教師だ。当のクイットは、今度は私に助けを求めてくる。

「サリアちゃん！　なんとか言つてあげて！」

「…………愁傷さまです…………？」

「いや、やうじやなくてね？」

もういいよーだ、とクイットは又深くソファに腰かける。横田にクイットを見遣ると、なるほど、氣だるさうにソファに身をゆだねるその姿も、なかなか様になつてこる。世の女性は幾らクイットがダメ男だとわかついても、この美貌にやられてしまうのだらう。（可哀そなのはクイットさんじやなくて世の女性だな。私は絶対こんなダメ男にはひつかかりませんよ!）……

心の中で切に願いながら、私はティーとの再戦に思惑を戻した。

さやつきやつとボードゲームにいそしむ弟とその護衛をちらりと見る。傍から見れば、とても仲のいい同世代の男の子と女の子だ。
微笑ましい光景だらう。

（とてもそういう匂いはしないけれどねえ……）

ティーが「たまには家で遊ぼう」と連れてきたその子からは、とても10代前半の女の子と思えない香りがした。成熟した女性の香りだ。果実のように甘くて、男を誘う香り。

（あんな子どもから、どうしたら香るのかなあ）

マジマジと見つめると視線がばれそうなので、ソファに深く腰掛け横田で観察しつつ思考する。だが答えは簡単には出ない。

（ふむ……まあティーがサリアちゃんに抱いている感情は恋愛ではなさそうだし、暫く放置しても大丈夫かなあ……どっちかって言うとあの田、尊敬の念だし）

熱心にサリアの一挙一動を観察しているティーを見て、思わず苦笑が漏れた。するとその笑いに気付いたのか、サリアがふつとこちらを見る。

（おひと）

「ん? 私もやっと混ぜてくれるの?」

おひとで身を乗り出して見せると、「今僕の番!」とティーには

ねつけられた。やれやれ、と肩を竦めてソファに身を戻す。サリアもそれ以上気にする様子はなく、またティーとのゲームに戻つていつた。そして5分も経たないうちに、サリアの後ろにあるドアが開け放たれた。

「ここに居たんですかティー、家庭科の、」

喋りながら部屋に入ってきたロイの姿を確認したサリアと、ティーとボードゲームをしていたサリアの姿を確認したロイが、同時に固まつた。両者の異変に、（ん？）と思つた時には、両者共すぐに平常を取り戻していた。

「そう、家庭科の実習の練習をしたいと料理長に頼んだのは貴方でしょう、忘れていたんですねか？」

「あ、そうだった！」

ティーが忘れてた！とバツと立ち上がる。

「全く……。ほら、厨房に行きますよ。今日はクッキーを焼くそうです。サリア、貴女も一緒にどうですか」

「え？あ、私なんかがお邪魔してよろしいのですか……？」

「ええ、是非に」

控え目なサリアの反応に、満面の笑みでロイが返事を返した。そして時は金なりと言わんばかりに、早速3人そろつて厨房へと旅立つていった。勿論ボードゲームの片づけはこちらに押し付けて。仕方なくボードを整理しながら、ロイとサリアの反応を反芻する。（あれは何かあるよねえ……）

あの笑顔は弟の友達に向ける笑顔じゃない。そしてサリアのやや引きつったあの顔は、友達の兄にも、護衛者の兄にも向ける顔じゃなかつた。

（例えるなら、大好きな女性に向ける笑顔と、その好意にひいてる顔つて感じ）

しつかりとボードを元の箱にしまい、よいしょ、と脇腹に抱える。確かこれはティーがロイから借りていたものだ。ならば私がきちんとロイの部屋に返すのが責務だろう。

(いつもいつも、私はかり女性関係に悩むのは、フニアじゃないよ
（ね）
知りたいと思ったら、知らなきや気が済まないのはショーベン家の性分である。幸い、クッキーが焼けるまで、まだ時間はたんとある。

ヒルダ、「ベルの場合②」

クレアのお菓子の買出しに付き添つて、俺は今、街で有名な菓子店に来ている。本来なら厨房の人間に頼んで買つてきてもらえればいいのだが、やはり自分で選ぶのが楽しいらしい。今日は何の予定も無かつたから別に構わない。しかし巷の女子に人気のこの可愛らしいピンク壁の菓子店で、18の男が妹と2人きりで買い物している図は、なんとも言い難い。

「……クレア、外で待つてる」

「うん、先に帰つたりしないでね、ベル兄様」「心配しなくともボーッとしてる」

クレアの許可を得て、広い店の外に出ることにした。しかし店の玄関に近づいたところで、ドンッと田の前の女性にぶつかった。

「つと、すみません！」

自分の肩に当たつて、濃紺のワンピースを着た小柄な女性がよろけてしまい、慌ててその女性の肩を抱いた。

「あ、ありがとうございます。前を見ていなくて…すみません」

女性は体勢を立て直し、ぺこりと頭を下げて謝る。お菓子を入れる編みかごを両手で抱えている姿は、まるで花摘みから戻ってきた農家の娘のようだった。

「ベル兄様！ もう、兄様は筋肉、ダルマなんですから気を付けてください！」

一連の流れを見ていたクレアがトトトッと駆けよつて来て、女性に謝る。

「うちの兄様がすみません、お怪我はありませんか？」

「いえ、大丈夫です……つて、あら？ クレアさん？」

「サリュエナさん！」

女性の顔を確認したクレアが嬉しそうに女性の名前を呼ぶ。

「クレア、知り合いか？」

「はい、アンティーケ雑貨屋さんを経営してゐる、サリュエナさんです。サリュエナさん、こちらの筋肉ダルマが兄のベルです」
また筋肉ダルマと口にして、クレアがサリュエナさんに紹介をする。筋肉ダルマと連呼されると、仮に悪意がなかつたのだとしても段々傷ついていくといふことをこの妹に知つてほしい。

「そうだったんですね。初めてまして、私サリュエナと申します。いつもロイさんとクレアさんには『」と顎頭にしてもらつています」

そんな思春期真っ盛りの男の気持ちなど知るはずもなく、サリュエナさんはふわりと笑つて自己紹介した。こちらも慌てて自己紹介する。

「ベル・シューべンです。いつもうちの兄妹がお世話になつています。お怪我が無くて良かつたです」

「私の方こそ、きちんと前を見ていなくてごめんなさい。今日明日久しぶりにお店を開ける予定だから、張り切つて買い込んでしまつて」

サリュエナさんは恥ずかしそうに笑う。

「今日明日、お店を開けになるんですか？」

クレアがきらきらとした目で問い合わせる。どうやらサリュエナさんがやつておられるお店は不定期営業のようだ。

「はい、宜しければ来てくださいね」

ぱああっと笑顔の広がったクレアが「はい」と返事をしたところで、「サリュー！会計するなら早くしないと、きちんと列に並んでもらうわよ！」とレジの方から声がかかった。

「お店の方もお知り合いなんですか？」

「ええ、私の人生のお師匠様みたいな方です。ちょっと口ひるせいけど、いい人なんですよ」

「一言多いよ、サリュー！」

「……そして地獄耳なんです。もう、今行きますから！」

そしてサリュエナさんがレジに向かおうとした時だった。

「今日明日はお店開いてるんですね」

「サリュウナさんの肩がビクンッとはねた。

「ここにちはサリュウナさん、こんな感じで会えるなんて奇遇ですね」

「なんで居るんだ、ロイ兄さん」

「なんで居るのかしら、ロイ兄様」

我らがシュー・ベン家の長男、ロイ兄さんが満面の笑みでサリュウナさんの後ろに立っていた。何故満面の笑み。

「ロ、ロイさん。奇遇です、ね……？」

語尾に疑問符をつけ、サリュウナさんがやや引きつった顔でロイ兄さんに笑顔を返す。

「ええ、奇遇ですね。今日明日明後日は三連休で学校もないでしょう？ ティーもサリアに会えなくて暇だろ？ と思つて、一緒に街に遊びに来ていたところなんです」

誰も聞いていないのに、ロイ兄さんが満面の笑みを維持したまま「何故ここに居るのか」を説明する。しかしティーの為と言う割には、ティーの姿がない。

「ロイ兄さん、ティーは？」

「あれ、居ない？」

はた、と気付いたようにロイ兄さんが辺りを見回す。しかし店内にティーと思しき少年の姿はない。クレアが「え、ロイ兄様、もしかして置いてきたんですか！？」と叫ぶ。「そうかも」とロイ兄さんが暢気に返す。

（この人は一体街に何をしに来たんだろう？……）

ロイ兄さんに代わって慌てるクレアを落ち着かせ、俺は深いため息を吐いて、今頃一人でわたわたしている弟を探すために店を出たのだった。

ティーはロイが街中を歩きまわる為だけの口実だった事を知っているのは、家で留守番している次男と、ティーを口実に使った長男本人だけだった。

「じるや、『サリュウナの場合』」

金色の髪を乱れなくピッカリとまとめあげ、クリーム色のワンピースに白いエプロンを身にまとい、忙しげに菓子店を仕切るその女性は、歳は35歳くらいで、少しきつい顔立ち。それでもそのハキハキした性格から、老若男女問わず好かれてい。その人の名前は、ルル・マホット。私サリュウナの人生の師匠にして、魔女としての師匠である。

彼女が使うのは「人を幸せな気持ちにする」魔法。大きく使えば麻薬のような効果を発し、小さく使えば食後の甘いデザートのような効果を発する、なんとも面白い魔法だ。彼女はその魔法を小さく使い、店で作るお菓子にちょっと振りかけて売っている。だからこのルルの経営する菓子店は、ルルが魔女である事を隠しながらも、「食べると幸せな気持ちになれる菓子店」として巷で有名だった。

「で？ サツキのが噂のロリコンのお兄さん？」
自分の店に帰ろうとしていた私を呼び止めたルルが、店の休憩室に私を連れ込み、唐突に切り出した。

「ああ、はい。ロイ・シュー・ベンさんです……」

すっかり顔なじみになつたお店のスタッフさんに出してもらつた紅茶をすすりながら、私は少し遠い目をする。やはり彼は一目みただけではロリコンに見えないのだ。私も暴露されるまで分からなかつたのだから当然だが。

「へええ？ 私にはそう見えなかつたけど、どっちかっていうと、あんたの事好いてる感じだつた」

好いている、とはどういう感じなのかわからないが、私は私自身の意見を述べる。

「でもの方、サリアの事が気になつて仕方ないって……」

「でも私にはそう見えた。ああ、もしかして、サリアとサリューは

同一人物ってバレてるんじゃないの？だからサリアにもアタックしてるとか？」

ルルは自分の店の菓子を頬張りながら、楽しそうに笑った。私は予想だにしていなかつた返しに、「まさか」と苦笑いする。

「だって私、覚える限り、バレるようなことしてませんよ？」

「でもあの人、シュー・ベン家の人都んでしょ？　だったらバレても不思議じゃないと思うけど？」

「え？」

シュー・ベン家だから不思議ではないという言葉に、私が何の事だかわからない、という顔をしていると、ルルが逆に「ええ？」という顔をして驚いた。

「シュー・ベン家は最近めきめき力をつけてる商家よ？　商家に最も求められる能力の一つが情報収集能力じやない。だからこそ、間接的ではあるけど、魔女に護衛なんて大それた依頼ができるんだと思わない？　そんな情報収集能力があれば、バレてもおかしくないでしょ？」

その言葉に、私は背筋がゾクツとした。

（まさか、まさかとは思うが、個人情報、収集されていますか…？）

そんな私の不安を読み取ったかのように、ルルはティーカップを口元に運びながら、にっこりと笑う。

「彼ら私達が魔女という素性を隠していると言つても、私達は世間の方々から魔女として仕事を請け負つてるんだから、完全に隠し通せることなんぞ出来ないでしょ」

そう、そうなのだ。魔女として世の人々と付き合つていけば、必ずどこかに隙がうまれ、綻びが生まれる。いくらこちらが簡単にバレないように色々と手を回しても、桁違いの情報収集能力を持つ者に調べられれば、バレてしまうこともある。

「じゃ、じゃあ、じゃあですよー仮に、ロイさんがサリアとサリュエナの事が同一人物だと知つていて、且つ私の事を好いてくれているとします。それならなんで、なんで最初から今までサリアだけに

アタックしてゐるんですか！？

「ロリコンだからじやないかしら……」

「やつぱりやつなるんですね……」

「……」

「」の悩みを解決したいが為に発した素朴な疑問は、最初の「ロイ
さんはロリコン」問題へと回帰させるだけだった。

ついで、「ロイの場合③」

弟に言われてやつと悩んでいたことがある。サリュエナ自身に好きですと言つて、それからサリアの秘密を知つてはいるといつた方が、格段に手つ取り早かつたのではないか、と。

「……」

後の祭りとはこいつの事を語つ。

「だからロイはサリュエナさんに良い顔されないんだよ?」

「……」

「そんな方法でアプローチとか、それつてサリアちゃんの事はバレないと思つてるサリュエナさんにとっては、「この人口リ「ン…ン…！」ってなつて当然じやない?」

「……」

「大体さあ、なんでそういう風にアプローチしちゃうかなあ? 普通に考えてみてもさ、好きな子の前で、他の女の人のことをめちゃくちゃ褒めるつて、有り得ないでしょ? ロリコン疑惑が生まれたなら尚更近づき難いじやない。これからロイはいつまで経つても結婚で、」

「もうその辺でやめてくださいクイット、世界がにじんできました」そつと田頭を押さえて、自室の机に突つ伏す。机周りには仕事の書類と個人的な書類、そしてサリュエナに関しての調査書が散乱していた。どれもこれも、自分がしばらく外出していた間にクイットがやつたものだ。まさかこんなに散らかされた上に、サリュエナの書類を発見されるとは思つていなかつた。「前回は見付けらなかつたんだけど、やつと今回見付けたんだ」と、満面の笑みで喋るクイットを見て、一見のうつぐうつと生きている弟をなめていたことを反省した。

「今からでもきちんと話してみれば? 何もしないでこのままロリコン疑惑を深めていくよりは、いい方向に進むかもよ」

まあ落ち込まないでよ、とクイットがポンポンッと肩をたたいてくる。

「それにサリュエナさんがダメだったとしても次があるじゃない！」「サリュエナさんが好きなんです……」

励ましのつもりで掛けられたであろう言葉に、更にがっくりと肩を落とす。お付き合いしている女性が次から次へと変わるクイットにしてみれば、AがダメならB…の思考で全く構わないのだろう。だがクイットと違つて恋愛慣れしていない自分は、サリュエナに振られてすぐに次の人に好きになることは出来ない。きっとダラダラとサリュエナへの想いを引きずる。それに直ぐに次へと行動が出来ていれば、この歳まで独身など貫いていない。

「32歳まで独身引きずるといつなるのか。私も早い内に身を固めた方がいいのかもしないね」

「クイットは結婚する前に刺されるから心配いりませんよ」

ボソッと呟かれた言葉にボソッと嫌味を返してみるが、クイットは気にせず先ほどの話を再開する。

「ロイの話に戻すけど。取りあえず、一度きちんとサリュエナさんに秘密を知つてることを話した方がいいね」

「そう、ですね……」

「何、そのやる気のない返事。私がサリュエナさんにアタックしに行つてもい、」

「来週の土曜日辺りはどうでしょう、来週の土曜日も午後からお店開くらしいのですが…」

「じゃあ来週」

クイットにだけは手を出されるわけにはいかないと焦つて返事をしたせいで、一世一代のプロポーズの日付が、弟の掌の上で決められていた。

こんなまぶしい笑顔を見せられて、次は何をされるのだろうと、気が気ではない休日の夜だった。

変化は突然に

都会の喧騒を離れ、田舎で1人暮らし。野菜類は自給自足。お肉や魚等は約2キロの道のりを経て、集落までまとめ買いをしに行く。自宅であるウッドハウスの周りには広い草原、穏やかに流れる大きな川。その川の向こうにはまだ峰に雪を残す、雄大な山。お隣さんもお向かいさんも居ない。こんな山奥でも、電気、ガス、水道、ネット環境は完璧。だから食料を確保しに出かける時以外はずつとこの家に引きこもっていることが可能。

そう、これこそ私が夢見ていた生活。誰にも邪魔されない、夢の空間。都会で生まれて都会で育ち、都会の喧騒に嫌気が差していた私に与えられた、至福の一時。

しかし平和というものは長く続かないのが世の常で。そんな私の生活を乱す、ふざけた3人組が川向こうに引っ越してきた。

全員変人という、ある意味最高な3人組が。

「あ、れ……？」

いつの間にか、川の向こうに大きめのウッドハウスが建っていた。煙突からは煙が上がっていて、既に人が住んでいることが見て取れる。窓越しにそれを発見した私は、眉間に皺を寄せた。先ほどまで睨めっこしていたパソコンの前から立ち上がり、窓辺によつて凝視してみるが、その光景は変わらない。

「うわあ、いつの間に……。私何日外に出て無かつたつけ。あの家運んできたのかなあ……。いや、そうだよ、運んで来たに決まってるじゃない。組み立てていた期間ずっと気付かなかつたとか、いくら引きこもりとは言え、そんな筈ないし、有り得ないし……」

無理矢理自分に言い聞かせ大きく頷きながら、そそくさとキックンへと移動し、業務用かと見紛う大きな冷蔵庫に手を掛けた。

「……おおっ？」

しかしその冷蔵庫の中はすっからかんだった。この大きさの冷蔵庫が空とは、本当に軽く数週間は引きこもつていたのかもしない。ネット上の仕事をしているから滅多に外に出る必要はないと高をくつっていた。

「いや、しかしこれはまずいぞ。食料が足きたらさすがに死ぬ……」
こんなところで死んだら、そのまま白骨化間違いなしだ。気付いてくれる人が居るとは思えない。

「うう、仕方ない。久々の日光浴兼食料確保の外出ついでに、私の夢の世界をぶち壊しそうなお向かいさんに挨拶しにいくか……！」
せつかくの悠々自適な生活にひびが入るのは残念だが、だからといつて一度目に入つたものを無視するわけにもいかない。それにこのままいくと、人間との会話方法を忘れそうなので、これは久しぶりに人語を交わす丁度良い機会だ。

ぐーっと背伸びをして身体をほぐしてから、とりあえずシャワー

を浴びに行くことにした。最後に入ったのがいつか、ちょっとばかし記憶があやふやだつたから。

「うわあ 鳥さんと豚さん」

お土産にと集落で買つてきた赤ワインを片手に、お向かいさん家の前まで来ていた。自宅の窓からは見えなかつたが、お向かいさんの影になるところでは、数羽の鳥と何匹かの豚が飼われていた。多分食用。

（そういえば最近お肉食べてなかつたな、美味しそう……）
「つて違つた！ 挨拶しに来たんだつた！」

危うく本能に流されるところだつた。爛々と輝いていた自分の目を落ち着かせ、低いところで2つに結わえた黒髪を揺らしながら、木製の階段を上つて玄関のドアをノックした。木製のドアは、コンコンッとノックを気持ちよく反響させる。すると中から「はあい、ちょっと待つてくださいねー」と、若い男性の声がした。

（男の人、なのか……）

自分の格好を確認する。チェック柄のシャツと黒のショートパンツ。先程自宅で着ていた、びろんびろんの部屋着より100倍マシだ。大丈夫、多分、大丈夫だろう。そうやって不安にしていると、「お待たせしましたー」と、ドアがギイッと外向きに開いた。ハツとなつて、咄嗟に笑顔を作つて挨拶しようとした。

「ここにちは、川向かいに暮らしているシェンで、」

「ああなんて可愛らしい方なんですか！－！」

突然熱い抱擁を受け、一瞬意識が飛びかけた。

大変だ、お向かいさんは変態さんだつ－！」

お向かいさん達は

「うひうひ、何してるんだい君は。『ごめんね、驚いたでしょ』」
訳が分からず混乱していると、奥から更に人が現れたようで、突然抱きついて来た男をベリッと引つ剥がしてくれた。変態から解放され、私は自由になつた頭を勢いよく下げてお礼を言つ。

「いえ、大丈夫です！ ありがとうございます」

「ふふ、悪いのはこいつだから気にしないで」

男性がゆるりと笑つた。少し視線を上げると、男性の腰辺りが視界に入る。その男性の服はあまり見かけない独特な服だつた。たっぷりとした柔らかな白の一枚布で身を包んでいて、黒の腰帯で布の流れを調整している。

(民族衣装とかなのかな)

そう思いながら更に視線を上にあげる。すると彼の半円状に肌蹴た胸元からは、鎖骨に沿つようく描かれた棘の刺青（いばり）がのぞいていた。

(……やばい！？)

身体に刺青を入れている人など、「その手の人」が大半だ。私は焦りから反射的に顔を上げて、そして硬直した。

危険人物の香りがする男性は、長い黒髪を後ろで結わえ、前髪を真ん中で分けていた。案の定顔、右頬にも棘の刺青が入つている。しかしそれだけならまだ吃驚して恐がるだけで済んだ。その男性はその手の強面という予想に反して、顔貌の整つた、柔和な面持ちの美青年だった。

「どうしたのかな」

「え、あ！ すすす、すみませ……！」

固定していた視線を逃げるようバツと横に逸らして、私はまた固まつた。視線の先には、さつき私に抱きついていただろうと思われる変態さん。その変態さんはワイシャツに黒のベストとズボンでまるで紳士のいでたちをしていた。そして金の短髪に包まれたその

顔もまた、乙女を撃ち抜く美形のものだつた。

「うえ、え！？」

急に現れた美青年2人に驚いて、思わず後ずさつた。すると当然、後ろにあつた階段との境目を踏み外し、

「あぶなつ……！」

後ろからボフツと誰かに抱きとめられた。声は男性だつた。この家の住人の内の1人かもしだれない。

「あ、ありがとうございま……！」

慌てて振り返ると、その人は首元から斜め下へとボタンの付いたの白い上着に、黒いスラックスのようなズボンを履いていた。東国に、こういう服を今でも着る人がいたな……等と思いつつ、その男性の顔に視線をあわせると。

「……またつ！？」

ウェーブのかかった顎までの白髪と、顔の脇の1本だけ長い3つ編みが特徴の、美青年だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367t/>

詰め合わせ。

2011年10月9日03時17分発行